

出句用紙(番号)

作者名

桃

鈴虫が鈴虫を食ふ夜の怪

低頭に幣巾の清らを受けて秋

お抹茶をすすと吸ひ上げ秋暑し

秋めくや屈託くつたつのない山羊いかりの長須ひげ

いつまでも若くあれよと新酒汲む

出句用紙(番号 2)

作者名 じんじ

余はあやめあふ天のしんを

梅雨の街行き行々梅雨の街

鑑 又る四月の路の金上りな

芥子 大目に遊ぶ新茶の清し

つまず 街と江戸の板木は風

出句用紙(番号 3)

作者名 真一

甘藷を語る上司の新走

桃山の金継ぎ盃に注ぐ新酒

盃と盃目と目で交わす新酒かな

六甲をそびらに万博秋夕焼

ちぬの海たゆたふ浪に暮れる秋

南柯句会

出句用紙(番号 4)

作者名 川村 正文

特	あらばしり母のかがりし羽織かな
	名残り蟬 せみ まがまな名残り日 ひ の名残り
	月の剣 つるぎ アパンマンの慈愛かな
○	懐 ふところ に狐 きつね の剃刀 かみそり 門出かな
	萩 あざみ の聲 こゑ 忍 しの びやかなり闇狐

出句用紙(番号5)

作者名 近藤和草

	。 。 。 。	。 。		
枝豆や三粒莢をお供えに	星月夜ゴッホの渦を探しをり	金の翅 はね 思い思いに秋茜	利酒や青き蛇の目の二重丸	新走酒造り唄丹波流

出句用紙(番号 6)

作者名 関 洋子

〇〇	再会に交はす新酒や可惜夜に	あたらよ
◎	切り子猪口透かし新酒の飲みくらべ	ちよこす
	「国宝」のロケ地巡礼秋うらら	
	肩並べ不登校児も夜学子も	
	新涼や湯上加りの髪友ほのかな香	

出句用紙(番号7)

作者名

南柯

ま ○	○	○	○ ○	ま ○○○ ○○○	◎ ◎
新酒酌む背筋正して一口目	秋日の風と葉音の混じる道	葉尽くしの空から注ぐつくつくし	大空や胸一杯に稲かほる	豊年の大地の中の道一本	

27 9/14

南柯

南柯句会

出句用紙 (番号 88)

作者名…(安藤) 英彦

〇〇〇〇	どや顔の秋刀魚の腹を摘み上ぐ つま
〇	愛しさは時の流れに揚げ花火 いと あ
〇	剣を抜き花を落とすか秋葵の実 オクラ
	力尽く秋を招ひて蔓返し ず つるかへ
兼題句 〇	杉玉の色を窺ひ新酒待つ うかが

出句用紙(番号 9)

作者名 山崎 たか

○○	○	○○	○	
格子戸の新酒より一歩入る	目に口にからまゝてゆく今年酒	新志杜氏の長鰓も言みこ きおく	白の花盃ニつ 今年酒	秋蝶や神の元なる城跡へ

出句用紙(番号 10)

作者名 二 罪

。	。	。	。。	。
爽涼や勝ちなき一生 ハルウラフ	夕刊に昼間の余熱秋暑し	妻見舞ふ日々の残暑の弛む無し	盃を下戸も差し出す新酒かな	虫の音や新酒新米新秋刀魚

出句用紙

白井桃紅

○ お供えは少し辛口あらばしり

○ 大将のこだわり並ぶ新酒かな

顔見せぬ女踊りや風の盆

○ 子も孫も居らぬ昼餉や敬老日

出雲琴かかえ始まる秋の祭

出句用紙(番号 12)

作者名 山下疾風

	○○○		○○○	
松茸の家苞うれし卓囲む	後添 のちぞえ を持たぬつれづれ秋彼岸	秋の田の稔りを待ちぬ黄爛々	銘のあるぐい呑みにかへ新酒干す	今宵また話あれこれ今年酒

出句用紙(番号)

13

作者名 岡本へちま

○○○	○○○	○○○	○○○	
土あれば虫の声あり眠る路地	鬱といふ二十九画乱れ萩	鈴虫や母の無い子の子守唄	留守宅や盗人萩の横行す	秘め事を「ごくり」呑み込む新走

出句用紙(番号14)

作者名 平草

〇〇	秋の酒はことしやかな嘘に酔い
	秋高し ^{ムキ} のブーサン街へ出る
〇〇〇〇	今日もまた ^{アタ} 後の散歩や秋時雨
◎	亡き母の書架に残せし拾 ^{アツ} 団扇
	贈られし新酒のラベル「古古古来」

作者名 上田秋霜

○○○	○○○	○		○○○
蜘蛛の囀に光る銀粒今朝の秋	ふるさとは母屋と納屋と葉鶏頭	かなかなに暮れゆく九重坊々鶴	父 ^ま 在さばさしで飲みたき新走り	瀬戸内の塩をひとふり新豆腐

出句用紙

作者名

藤子工

兼	〇〇			
ほべ下戸も今宵だけとはと新酒吸む	役目終之尚も律儀に立つ案山子	枝豆やテレビの前で観の山	母と娘のフェイスタイムの夜長かな	夕日浴び金色深む稲穂並

出句用紙(番号 17)

作者名 福田洗弥

○	石ころの静かに眠る律の調べ いしころのしずかにねむるりつのしらべ
◎	盃交わす光をすくふ新酒かな はっかいめ
○○	秋湿り甘く匂いの四工室 あきじめ
	庭先にひそかに実る葡萄かな はだいろ
	アワセルと踏み込み合流天高し

作者名 上宮泰千

南柯句会

19
8年

出句用紙・作者名・宮本こぼ



秋はじめ恋の魔法が解けたとき

配るチラシ貰ってあげて秋はじめ

〇〇 帰りゆくゴジラの尻尾しっぽ秋初め

〇 秋うれしハンドパペットの予報士

オークションの古伊万里で利く新酒哉

三位

出句用紙・作者名・鮫島しょうん

20
—

金印の倭の字まばゆし新酒汲む

かなかなや木立に高き闇ありて

飛び入りの手は奔放に阿波踊

傘の音ときどき拾ふ花野かな

抜け殻のヤンマヤマトを越えゐるか

出句用紙・作者名・富野香衣

21

○
○
秋天の臍へ紙飛行機刺さる

○
○
○
嵯峨野までお供しませう盆の月

○
○
○
○
始まらぬ恋を了はらせ夜の桃

○
○
雄弁に秋の夕日は沈みけり

○
○
句のごとく舌に転がし今年酒

作者名 安藤町彦

8	一旋回してより秋の蝶とまる
回88	ただ海を見ているだけの夏帽子
888	天窓に透けて晩夏といふ時内
○	鵜鴎の塩牛タニに樽梅様をきりや
888	駄弁の短き箸や今年酒

顔見えぬ女踊りや阿波の夜

表彰に縁なく生きて法師蟬

若々し古希を祝つて今年酒

荒走り肴は土佐の一夜干し

アングスの塩を一舐め新酒かな